2016年
1月8日
金曜日

『太った男を殺しますか？』

山鹿　久木　教授（都市経済学）

倫理観・道徳観は、人によって、あるいは状況によってもさまざまです。よってもたらされる結果もまったく正反対であることもしばしばです。この点を考えるのにふさわしい2つの本（話）を紹介します。

最初に紹介する本は、『太った男を殺しますか？』（太田出版）です。トロリー問題と呼ばれる倫理学の有名な思考実験です。2つの状況が設定されており、そのそれぞれについて許されるかどうかが問われています。この問題について、さまざまな立場の議論をまとめた本です。

第1の設定

トロッコ列車が制御不能になっており、その線路の上にかかる陸橋に、私が立っている。線路の先には作業をしている5人がいる。私が飛び込んでトロッコを止めれば自分を犠牲に5人が救える。しかし、あいにく自分は体重が不足していて、トロッコを止められそうにない。そのとき、たまたま私の隣に、トロッコを止めるに十分な体重の太った男がいた。この太った男を突き落としますか？

第2の設定

同じように制御不能なトロッコに対して、今度はポイントを切り替えることで、引込み線にトロッコを誘導し、5人を救えるという設定です。しかし、引込み線の先には1人が作業中で、やはり1人の犠牲は免れないのです。そこで、私はポイントを切り替えますか？

どちらも5人の犠牲と1人の犠牲をてんびんにかければ、1人の犠牲を選択するはずですが、第1の設定ではその選択が許されず、第2の設定は許される、という価値判断が多いのです。法律の話ではなく、道徳・倫理の話としての問題です。すなわち、状況によって人々の判断は変わってしまうということです。

2冊目は、ル・グィンが書いた『風の十二方位』（ハヤカワ文庫）に収録されている短編「オメラスから歩み去る人々」という話です。これはSFですが、時々引用されることがある有名な話です。

オメラスという村があり、そこに住む人々は皆、幸せな日々を過ごしていました。そこでは、犯罪もなく、政治も安定し、老若男女が本当に幸せに暮らしていました。しかし、その幸せな状況を手に入れるために、村人たちは1つの契約を交わします。それは、1人の子供の幸せを犠牲にする、ということです。10歳になるその子供は村の地下牢に鎖でつながれており、食事もろくに与えられず、窓もない掃除もされない部屋にずっと閉じ込められています。1人の子供のその犠牲の代わりに、村人みんなの幸せを手に入れているのです。人々は10歳を過ぎたころにその事実を告げられ、その契約を受け入れるわけです。その事実を知った上で、地上での何の不自由もない幸せな生活を送っているのです。子供を救うこともできますが、そうすれば、多くの人の幸せがなくなります。

この設定は、多くのことを考えさせてくれますが、もう1つのポイントがあります。話のタイトルにもなっていますが、村から外に出ると厳しい現実が待ち受けているにもかかわらず、毎年、この村から去っていく村人が必ず少数いる、という点です。

最初に効率性を重視し、十分考えた上での倫理、公平であることが経済学では重要です。■